

氏名	おお ろ しょうたろう 大 呂 昭太郎
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	甲第551号
学位授与年月日	平成18年 3月10日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	何が終末期癌患者の療養生活に重要か ―患者、家族、 医師、看護師の理解の相違
学位論文審査委員	(主査) 池口正英 (副査) 清水英治 稲垣喜三

学位論文の内容の要旨

終末期癌患者の QOL を改善するためには、患者が何を望み、何を重要と考えているのかを知ることが重要である。生の最終段階で重要と考えられることを知るために、そして周囲の人が重要と考えることとの違いを調べるために、33名の終末期癌患者、200名の癌死した患者の家族、200名の医師そして200名の看護師に質問票を用いた調査を行った。

対象と方法

対象は患者、家族、医師、看護師の4群である。患者は真の病名と病状の説明を受け、それを理解していると判断した終末期癌患者33名であり、家族は癌死した患者の家族200名である。医師は終末期癌患者の診療の担当経験のある医師200人であり、看護師は終末期癌患者の看護、介護の経験のある看護師200人である。終末期療養生活における重要項目を40項目含む質問票を作成した後、それをもとに患者に対しては可能な限り直接面接にて調査を行い、他群については質問票を送付し、郵送にて回収した。40項目全てについて各回答者群の重要度評価を調べた。また患者群とその他の群との間の回答の違いを比較するために質問項目ごとに χ^2 検定を行った。

本研究は鳥取大学医学部附属病院倫理委員会による承認(2003年9月、承認番号305)のもとに実施した。

結果

患者33名中26名(78.8%)、患者の家族200名中123名(61.5%)、医師200名中151名(75.5%)、看護師200名中163名(81.5%)であった。結果より終末期医療においては、患者、家族、医療従事者間の信頼関係構築が非常に重要であることがわかった。また患者は“今後起こりうる体調、病状の変化を知ること”、“セカンドオピニオンを自由に聞けること”、“医師が隠し事をしないこ

と”などの治療情報を得ることが重要と考え、自身の治療経過が十分に納得できるものであったことの確信を求めていた。一方、看護師は患者のスピリチュアリティーに関連する事項を重要と考える割合が高かったが、患者は“家族や社会の重荷にならないこと”を重要と考え、意識の乖離が認められた。

考 察

医療者が終末期において症状のコントロールや身体的ケアを重要と考えるのは当然であるが、患者との十分な信頼関係を構築し、患者が悔いのない死を迎えられるように努力を積み重ねる必要がある。患者が重要と考える項目について家族、医師、看護師との間には相違がみられるが、今後の緩和医療を充実したものにするために医療者は患者の考えと医療者の認識のどこに相違があるかを十分に理解し、そのうえで絶えず患者、家族とコミュニケーションを図り、患者の表出しない感情にまで踏み込んでいく勇気をもつことが重要である。

結 論

癌の終末期医療においては、患者と医療者の間に意識のずれが存在することを医療者は認識すべきで、医療者は終末期における癌患者の意識に十分に耳を傾ける必要がある。

審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、終末期癌患者の QOL を改善することを目的に、終末期癌患者、癌死した患者の家族、医師そして看護師に質問票を用いた調査を行い、検討したものである。その結果、終末期療養生活においては患者、家族、医療従事者間の信頼関係構築が非常に重要であることが判明した。また、患者は自身の治療情報を得ることが重要と考え、自身の治療経過が十分に納得できるものであったことの確信を求めていた。一方、看護師は患者のスピリチュアリティーに関連する事項を重要と考える割合が高かったが、患者は“家族や社会の重荷にならないこと”を重要と考え、患者との意識の乖離が認められた。以上の結果は、終末期癌患者の療養生活の QOL を改善、向上するために極めて重要な情報であり、今後の緩和医療に対する提言となりうることから、明らかに学術水準を高めたものと認める。